清流に遊ぶ錦鯉のあざやかな色も幾分にごって見えようというものだ。このように云っては、当局者にとっていささか酷かもしれぬ。さいわいなことに大溝周辺にはまだ有力な汚染源は無いようだが、早急に下水道を整備しておかないと観光都市の名に傷がつくだろう。

この萩においても古い城下町特有の直角に折れ曲がる狭い道路は頭痛の種で、少しでも広い道路敷をとりたい筈であるのに、ここではまだ水路を暗渠にせず活用している。その積極的な意欲は高く評価されよう。

山紫水明は古来、人の渇望するところである。清らかな流れ、特に都市の内部でそれが見られるならば、どれほど人の心をなごませることか。すでに過密の都市ではそれは夢のまた夢のことと人々は思いこんでしまい、ビルの中に設けられた人工の川、人工の滝が話題になる。あのせわしい水の流れが果して心のやすらぎになるだろうか。

私達の住む土浦は「水のまち」あったのだ。古い地図や年輩者の話によれば、市内いたる所に水路があり、川と人々のつながりはきわめて密接なもので、四季それぞれの楽しみをそこに求めていた。それは川島地区の現在の生活と同じようであったはずだ。現在市内のあちこちに残る、小さなよどんだ水路も、曾ての桜川・霞ケ浦を中心とする河川ネットワークの中では、はるかに生き生きとした役割を果していた筈である。相互関連の中で働いていたこれらの流れのつなぎの部分を切りとることによって、このネットワークのエネルギーを奪ってきたのである。そのようにしておいて、次には川がよどんで臭いという理由で地下に埋めこんでしまったのである。交通事情の悪化などという口実もつけて。

このままでは、土浦城の内堀にしても、まったく同じ理由によって近い将来、駐車場にされてしまわないという保証はどこにもない。

それを防ぐ手段はある。それは、桜川からの取水によって市内の河川ネットワークに再びエネルギーを注入すること。「図説土浦市史」によると、室町時代に土浦の町を洪水から守るため、町内を流れていた桜川を、虫掛下の油免から現在の桜川に切りかえたものだという。市内の水系の骨子はこの時にできたものである。私達は、